

持続可能な地域活性化について  
～外国人によるフットパス体験ツアーの検証～

福岡県立鞍手高等学校

大村 ひかる 種具 優花 深町 美羽 平野 麻衣 藤原 心優  
指導教員 松本 邦明

要旨

かつて炭鉱の町として繁栄した直方市。石炭産業の衰退とともに、地域からはかつての活気が失われている。そこで私たちは地域の人々が主体となって地域を活性化させる手立てとして、イギリス発祥の「フットパス」に注目した。私たちはフットパスの地域への導入とその効果について研究を行っている。特に今年度は外国人のフットパス体験ツアーを実施し、その効果について検証した。

1. テーマ設定の理由

高齢化や過疎化が全国各地で進行しているなか、活性化に向けた様々な地域づくりが取り組まれている。これまでの多くの地域づくりは、グルメや歴史、祭りなど、テーマを定めて実施するイベントが多かった。しかし、近年、地域活性化の一環としてフットパスに取り組む地域が全国各地で少しずつ増加している。そもそもフットパスとは、「森林や田園地帯、古い町並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと（foot）ができる小径（path）」である。田舎道を歩くことで健康や観光振興につながるという側面だけではなく、地域住民が主体的にフットパスに取り組むことを通じて、地域づくりを進めることになる。そのため、現在人口は減っているが海外からの移住者が増えている筑豊のような地域の衰退を阻止する手段として、私たちは、フットパスに注目した。

今年度は、外国人を交えたフットパス体験ツアーを実施し、地域の人々への影響やフットパスに関わる高校生・大学生について調査した。特に今回はフットパス体験によるコミュニケーション能力の変化について焦点をあてて研究した。

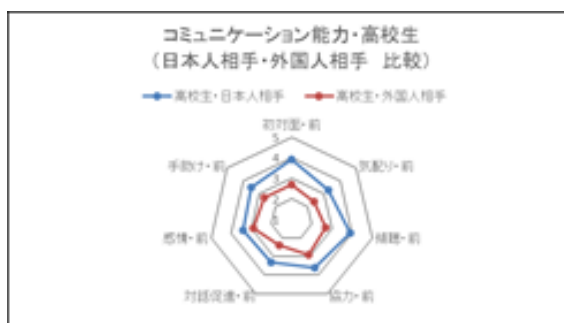
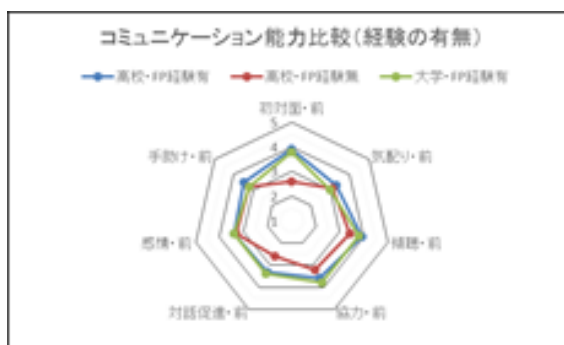
2. 研究方法

まず初めに、講義を通してイギリスのフットパスおよび日本で行われているフットパスに関する基本知識を習得した。そして、地域を調査し、フットパスコースを設定した。その後、外国人によるフットパス体験を実施。地域の人、外国人、高校生、大学生に対してアンケート調査を行った。アンケートは、「初対面の人でも話しかけやすく、和やかな関係を作ることができる」「相手の立場に立って考え、相手への気配りができる」「相手の話に興味を持ち、表情や態度を表しながら話を聞くことができる」「集団の中で自分の役割を果たしつつ、周囲と協力することができる」「議論・対話が活発になるように自ら働きかけ、全員に意見を促すことができる」「相手の感情を受け止め、理解していることを態度や言葉で示すことができる」「周囲の状況に気を配り、タイミング良く手助けができる」という内容で行い、地域の人、外国人に対しては自由記述のアンケートを実施した。

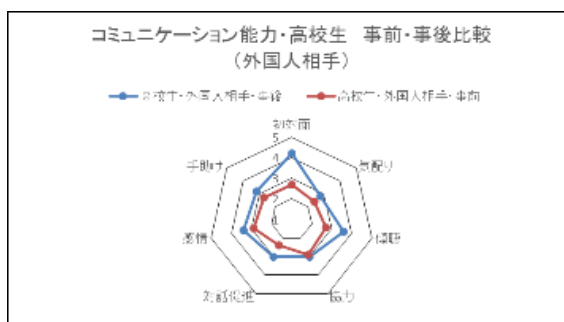
さらに、高校生、大学生に対してもコミュニケーションに関するアンケートを実施した。フィールドワークや地域との交渉については北九州市立大学と連携した。また、高校生アンケートには福岡県立中間高校フットパス部に協力をお願いした。

### 3. 検証・考察

まず、イギリスにおいて、三年生の先輩方に依頼して実際にフットパスを体験している人に聞き取り調査を行ったところ、フットパスの楽しみ方が日本と異なっていることが分かった。今までのアンケート結果から、日本人は歴史を学ぶことができたり、地域の特徴を知ることができたりすることに価値を見出してフットパス体験をおこなっているが、イギリス人は、「歩くことをただ純粋に楽しむ」という意見が多かった。さらにコミュニケーション能力に関する事前アンケート調査結果については、フットパス経験がある大学生とフットパス経験がある高校生とのアンケート結果の数値はほとんど同じであった。また、高校生のフットパス未経験者とフットパス経験者の比較においては、「初対面の人でも話しかけやすく、和やかな関係を作ることができる」という項目や、「対話が活発になるように自ら働きかけ、全員に意見を促すことができる」という項目において、大きな差が見られた。また、外国人を相手にした場合のコミュニケーション能力について、日本人を相手にした場合と比べて、全体的に数値が低くなり、コミュニケーションが消極的になる傾向が見られた。



続いて外国人を交えたフットパス体験後のアンケート結果からは、「和やかな関係を作ることができる」や「しっかりと相手の話を聞く」という項目において、事前アンケートと比較して上昇して数値が上昇した。事前アンケートからはコミュニケーションは消極的になると予想されたが、実際は身振りや手ぶりを交えながらも、積極的に対話する姿が見られ、その結果が事後アンケートに表れる結果となった。



そこで私たちは、このフットパスにおける「歩く」という体験に対して、「歩く人」とそれを迎える「地域の人」との間でどのような心理が働いているのかについて考察した。そこでヒントになったのが「単純接触効果」である。「単純接触効果」とは、ある対象に反復して接触

することで、その対象への好感度が高まる現象のことを言う。私たちも実際にフットパスに関わって、感じたことだが、フットパスでは、未知の人との単純接触が繰り返し行われている。地域の人は歩く格好をしている人を見ると自然に声をかけるようになり、歩く人もフットパス体験の繰り返しにより、地域の人に対して好意的な印象を持ちようになる。地域の人と歩きに来る人が互いに好意をもって接触することで、相互にコミュニケーションが促進される。私たちはこれを『フットパスによる単純接触効果』と名付けた。

#### 4. 結論

フットパスの活動を通して地域住民を多く巻き込むことができた植木町でのフットパスは、コースを歩く際に出会った住民に声をかけ、鞍手高校でフットパスの活動を行っていることや、住民も参加できる場をつくるなどの団体側の気配りや配慮によって住民が参加しやすい環境をつくりだしていることがわかった。また、イギリスのフットパスと日本におけるフットパスの展開の仕方は、聞き取り調査を行い、随分と異なることがわかった。日本では地域おこしや、住民と歩く人との触れ合いが重視されている。外国人にとって地域の特色を知ることができる日本のフットパスは十分に楽しめるものであり、日本人が普段何とも思っていないようなことも、十分な観光資源になりうると言える。また、地域の人にとってもフットパスを通じた新たな発見があったり、新たなコミュニケーションの機会が増えたりするなどの効果がある。さらに、フットパスに関わる大学生や高校生のデータからは、フットパスに関わることがコミュニケーション能力の育成に効果的であると推測される。

#### 5. 今後の課題

1つ目は、道路の整備状態だ。今回歩いたコースの中にはところどころ歩行者用信号がない場所がある。植木地区は車がたくさん通るわけではないから、危険ということはないが、もっと安全にフットパスを行うのなら、信号は必要だと思う。また、イギリスのようにフットパス専用の道を導入するなどして、フットパスを盛んにすることも有効であると考えられる。

2つ目は、地域の方との交流が少なかったことだ。実際交流はしていたが、大学生と一緒に交流だったため、自分たちから進んで交流することができなかった。フットパスを進めるにあたって、地域の方との協力がとても大事だと実感した。地域のことを詳しく知っている方と話すことで、自分たちがみつけだすことのできなかつた解決策がみつかっただろう。

3つ目は、植木地区フットパスをより多くの人に知ってもらえるようにすることだ。そのために、定期的にフットパスツアーを行い、日本人・外国人を問わず、多くの人に参加してもらうようにする。また、地域や行政と連携してフットパスガイドを育成するシステムを構築する必要がある。さらに高校生や大学生が、日本語ガイドや英語ガイドのボランティアとしての講習を受けられるようにする。このように地域全体で取り組んでいくことが今後の課題である。

#### 参考文献・論文

「フットパスによるまちづくり」(水曜社) 2014.神谷由紀子

「単純接触効果と無意識」～われわれの好意はどこから来るのか～ 2015.川上直秋